

授業研究

問題の提起・国語科

考えたことを伝え合う力を育成する

国語科授業づくり

—— 第二学年 説明的文章を読むこと「ロボット」の実践 ——

広島大学附属小学校教諭 中田 江美



一 はじめに

広島大学附属小学校では、令和六年度まで、「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成」を目指した実践研究を行ってきた。この研究を通して、多様な〈他者〉に出会い、受容しながら学ぶ姿や、〈他者〉を感じる学びの蓄積により、授業を離れても〈他者〉を求め、多様な〈他者〉に向き合おうとする姿を実現する教材や実践の方法を追究することができた。この実践研究を踏まえ、令和七年度には、〈他者〉との学びによって意識化させる自己に焦点を当て、「教材と『わたし』をつなぐ読みから自己

を語る国語科授業づくり」を研究テーマに掲げて実践研究を行った。

本稿では、第二学年の説明的文章を「読むこと」において、考えたことを伝え合う力の育成を目指した国語科授業実践について述べる。この「ロボット」の実践では、教材と「わたし」をつなぐ手立てとして、「あったらいいな」と思うロボットを提案する言語活動を設定した。この手立てによって、学習者である「わたし」によって何が語られたのかを検証していく。

なお、本稿における「考えたことを伝え合う力」とは、「意見を出し合うことを通して、他者の考えを受け入れ、

自分の考えを再構築する力」と定義し、単なる意見の出し合い（交流）に留まらず、内面の変容を目指したもの（共有）であると補足しておく。

二 授業について

（一）単元

考えたことを伝え合う（「ロボット」、佐藤知正、光村図書二年）

（二）単元デザイン

本教材「ロボット」は、日本のロボット研究の専門家である佐藤知正氏が教科書のために書き下ろした文章である。この説明文は、「はじめ」に問い、「中」に答え、「終わり」にまとめが書かれている三部構成の双括型である。問いと答えを捉えやすい文章であるため、児童は、低学年における説明文の学習を振り返りながら読むことができる。また、「終わり」の段落において、筆者は、「あなたは、どんなロボットがあればよいと思いますか。」と読者へ呼びかけている。そのため、児童は、筆者の考えを基に「こんなロボットがあったらいいな」という考えを、必然的にもつようになると考えた。これらのことから、本教材は、低学年における説明文の学習の集大成と

してふさわしいとともに、文章を読んで考えたことを友達と伝え合うのにもふさわしい教材であると考えた。

本学級の児童は、「たんぽぽ」の学習では、時間的な順序や事柄などを考えながら、内容の大体を捉える学習を行った。「どうぶつ園のかんばんとガイドブック」の学習では、文章の中の重要な語や文を考えて選び出し、二つの文章を読み比べる学習を行った。「あなのやくわり」「ビーバーの大工事」では、文章の内容と自分の体験とを結び付けて感想を書く学習を行った。どの学習においても、具体物や写真などを手掛かりにすることで、文章に書かれている内容を正確に理解したり、読む目的を意識することで、必要な情報を見付けたりすることができた。また、文章の内容と結び付けることができる具体的な場面を全体で考えることで、児童一人一人が実際の体験と文章の内容を結び付けて読むことができた。低学年における説明文の学習で身に付けた力を十分に発揮できるようにするとともに、中学年の学習を見据えて、考えを共有する中で互いの考えのよさに気付くことができるようにしたいと考えた。

指導にあたっては、第0次で、ロボットが登場する物語や絵本を教室内に置き、児童が並行読書したり、教師